

令和5年度 学力重点指定校報告書 五日市観音中学校

1 学校の課題

※データ等を基にした学校の課題

3年間の全国学力・学習状況調査の結果【表1】から、本校の平均正答率は3年間連続で10%程度全国平均を下回っている。

また、正答率の分布【表2】を見ると、本校の正答率30%未満の生徒の割合が42.2%（全国比+17.2）、正答率60%未満の割合が83.3%（全国比+18.6）となっており、全国と比較して学力の分布が低い方に大きく偏っており、低学力層の学力定着に課題があることが分かる。

数学	平均正答率	
	全国	本校
R3	57.2%	47.0%
R4	51.4%	36.0%
R5	63.0%	52.2%

数学 正答率	相対度数		累積相対度数	
	本校	全国	本校	全国
0~30%	42.2%	25.0%	42.2%	25.0%
30~60%	41.1%	39.7%	83.3%	64.7%
60~100%	16.7%	35.3%	100.0%	100.0%

【表1】全国学力・学習状況調査

【表2】正答率の分布（令和5年度）

さらに、全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果【表3】において、「数学の勉強は大切だと思う」と回答している生徒が85%で、全国平均と同程度である一方、「数学の授業の内容はよく分かる」と回答している生徒は68.6%（全国比-7.6）であり、分からないという意識を持っている生徒が全国平均と比較して多い傾向にある。

	肯定的回答の割合	
	本校	全国
数学の勉強は大切だと思いますか。	85.5%	86.6%
数学の授業の内容はよく分かりますか。	68.6%	76.2%

【表3】全国学力学習状況調査（質問紙）

生徒の学習行動の要因についての理論的研究を行った社会認知理論においては、個人が特定の目標や課題を達成できる自信の程度（自己効力感）が、その行動や努力に対するモチベーションに影響を与えるとされている。つまり、本校の生徒は数学の授業の内容に対しての「分からない」という自己効力感の低さが背景にあるため、授業中の積極的な姿勢や家庭での学習習慣が身につかず、学力が身につけていないと考えられる。そのため、数学の学習に対して「できた」「わかった」という自己効力感を高めることが、授業や家庭での学習行動を促すと考えられる。

以上のことから、本校において学力を向上させるためには次の2点を課題として捉えた。

【課題1】 基礎の定着が不十分な生徒が多く、学習が得意な生徒と苦手な生徒の学力差が大きい。

【課題2】 「できた」、「わかった」の自己効力感が低く、学習への意欲を引き出せていない。

このような課題があることから、生徒一人一人が主人公意識を持ち、「できた」「分かった」を実感し、学び続けることができるように支援する必要がある。

2 研究主題

「生徒一人一人が主人公意識を持った授業の在り方
～すべての生徒の学びを支えるGKN学びの50分モデルを通して～」

3 取組内容

※1の課題解決に向けて、重点的に取り組む項目とその具体

先に挙げた2つの課題を改善するために、以下の取組内容を中学1・2年生を対象に行った。

【課題1】 基礎の定着が不十分な生徒が多く、学習が得意な生徒と苦手な生徒の学力差が大きい。

(1) 授業開始5分以内に協同学習（ペア・グループ）の導入

- ・ 協同学習が全ての時間で取り入れられるように、協同学習を取り入れた授業スタンダードを作成し、全職員、全生徒に周知した。（別紙1）生徒には協同学習のルールとして、「4人で課題にチャレンジする。分からないときはグループの仲間に聞く」、「聞かれた人は丁寧に説明する」「『分かった』というインプットで終わるのではなく、『説明できた』というアウトプットで終わるようにする」などを定めた。
- ・ 授業の導入場面ですまずいてしまうと、本時の展開部分では意欲を失ってしまう生徒が多く、ケアしても学習に戻ることができない生徒もいる。そのため、生徒のあらゆるつまづきを想定して、授業開始5分以内に協同学習（ペア・グループ）の机にして、子どもを独りにせずに分からないことをすぐに聞けるような学習環境にした。

(2) 丁寧な問題把握

- ・ 本時で解決すべき問題の文を教師が読み上げるだけでは、学習が苦手な生徒にとって問題の意味を把握するのが難しいことが多い。問題文を読んだ後に、答えられそうな生徒に「この問題では何を聞かれているの？」と問い、問題の意味を複数の生徒の言葉で言わせるようにする。

(3) 支援が必要な生徒の丁寧な見取り・支援

- ・ 教師の支援が必要なグループと必要ではないグループがある。そのため、グループの活動場面での生徒の様子を見取りながら、支援を要する生徒を見つける。生徒の見取りを行う際に、佐藤（2024）は「できるーできない」ではなく、「心の動き」を見るのが大切であり、与えられた学習課題や教材を子どもがどう受け止め、その子がこれから何をしようとしているのか、あるいはできずに止まっているのかをつぶさに捉えることの重要性を説いている。困っている生徒には次のような行動が見られることが多いため、以下に挙げる視点で生徒の見取りを行い、学習に対しての支援と、意欲を高めるためにできているところまで丸付けを行うなど肯定的な評価を行った。

《困っている生徒の行動（見取りの視点として）》

- i 両手が机の下に入っている。
- ii 椅子が机から離れている。
- iii ペア（グループ）活動の時に体が相手の方を向いていない。
- iv グループ活動の時に机と机の間が離れている。
- v どこか落ち着かない様子で他の人の様子をうかがっている。



支援
肯定的評価

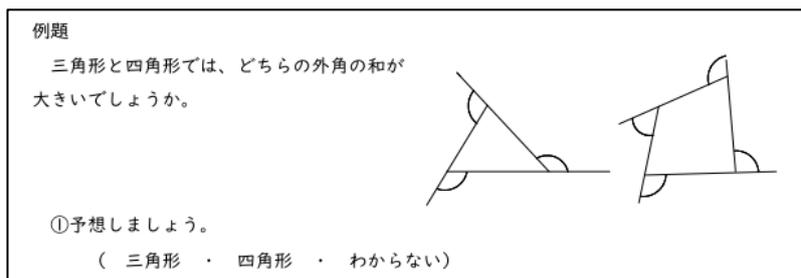
(4) 授業後の小テスト

- ・ 本時の学習内容の定着度合いを生徒自身が振り返ることができるように、授業の最後に小テストを実施した。定着率が一定の水準に到達するまで同じ内容の小テストを複数回実施した。

【課題2】 「できた」、「わかった」の自己効力感が低く、学習への意欲を引き出せていない。

(1) 授業の導入での予想

- 授業の冒頭に予想や比較を取り入れることで、すべての生徒が授業に参加するきっかけを作ることができ、予想の活動を通して「なぜだろう？」という意識を持つことができれば主体的に学習に取り組むことができると示唆されている(相馬 2020)。そこで、相馬を参考にしながら、授業の初めに「予想→どれが正しいだろうか?→考えてみよう」という授業を設計し、予想したことが正しいかどうかを確かめたり、目的意識を持って主体的に考え続けたりすることができるような授業構成にした【図1】。また、生徒の予想・意見が分かれ、教室内に葛藤が生じる方が生徒の意欲も高まるため、問題の内容・問題提示の方法なども重要である。



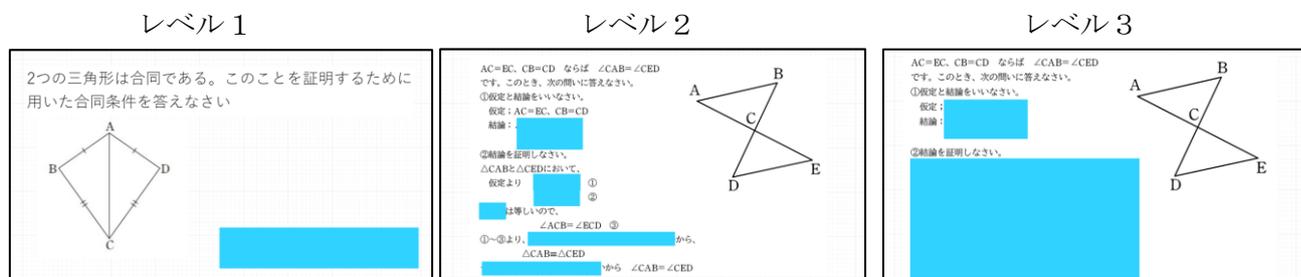
【図1】 予想を取り入れた教材

(2) 定期試験の学習用の教材の作成

- 定期試験の際に、学習が苦手な生徒から、「テスト範囲が広すぎて、何から手をつけていいかわからない。」という声が多く見られた。学習が苦手な生徒の学習への意欲を高めるためには、「これをやれば学習内容を理解することができる」という安心感を持たせることが重要である。そこで、定期試験の範囲のポイントを絞った定期試験学習用プリントを配布した。

(3) 証明活動の前段階としてのペアトーク

- 単元「平行と合同」、「三角形と四角形」では図形の性質を証明した。これまで証明を書くという活動は行ってこなかったために、これまでの学習と比較して学習へのつまずきが多く、学習への意欲が高まらなかった。そのため、証明を書く前段階として、授業の冒頭にオクリンクの課題カードの証明問題を相手に話して伝えるという活動を取り入れ、証明に対しての自己効力感が高まるようにした。なお、自己の学習の到達度によって課題の難易度を選べるようにオクリンクのカードを3種類準備した【図2】



【図2】 難易度別のオクリンクのカード

4 検証結果

※成果指標の検証方法および結果

それぞれの課題に対しての取組の成果指標を以下のように定め、取組の成果を検証した。

【課題1】 基礎の定着が不十分な生徒が多く、学習が得意な生徒と苦手な生徒の学力差が大きい。

成果指標：標準学力踏査（平均正答率、正答率30%未満の生徒の割合）【表6】

- ・ 1・2学年ともに教科全体の全国平均との差は改善された。
- ・ 1学年では基礎よりも活用において本校が全国よりも13.2ポイント上回っている。
- ・ 2学年では、基礎・活用のどちらも全国平均を下回っているが、活用よりも基礎の方が全国とのポイント差がより改善傾向にある。
- ・ 1学年・2学年ともに正答率30%未満の生徒の割合が増加している。

	1学年					
	教科全体		基礎		活用	
	6月	12月	6月	12月	6月	12月
本校	65.6%	→ 56.2%	67.6%	→ 57.3%	59.7%	→ 52.1%
全国比	-0.2%	→ 3.3%	0.1%	→ 0.7%	-1.3%	→ 13.2%

【表4】 1学年の正答率

	2学年					
	教科全体		基礎		活用	
	6月	12月	6月	12月	6月	12月
本校	43.6%	→ 44.3%	49.1%	→ 50.4%	27.6%	→ 29.7%
全国比	-9.8%	→ -2.8%	-10.4%	→ -2.1%	-8.3%	→ -4.4%

【表5】 2学年の正答率

	1学年		2学年	
	6月	12月	6月	12月
本校	11.0%	→ 13.0%	38.0%	→ 40.0%

【表6】 正答率30%未満の生徒の割合

【課題2】 「できた」、「わかった」の自己効力感が低く、学習への意欲を引き出せていない。

成果指標：学校評価アンケート（授業の理解度、学習への主体性についての項目）【表7】

- ・ 1学年においては、「授業の分かりやすさ」、「学習への主体性」、「分かった感覚」の3項目において減少した。
- ・ 2学年においては、「授業のわかりやすさ」、「分かった感覚」は微増したが、「学習への主体性」については減少した。

	1学年		2学年	
	6月	12月	6月	12月
学校の授業は分かりやすいと思う。	92.1	→ 89.2	84.1	→ 84.7
自分は主体的に授業に取り組んでいると思う。	84.1	→ 79.7	80.0	→ 78.7
授業で、「分かった」「できた」と感じることができた。	95.1	→ 92.4	89.0	→ 90.7

【表7】 学校評価アンケートの結果

5 研究成果

※成果・課題等

《成果(○)・課題(●)》

(1) 【課題1】に対する取組みの成果・課題

- 1学年、2学年ともに全国との差が改善傾向にあることが成果と言える。これは1学年、2学年ともに毎時間の授業の中で協同学習を通して、生徒同士でつまずきを解消するための相互作用が生まれたことが背景にあると考えられる。
- 2学年において活用の全国との差が-8.3ポイントから-4.4ポイント改善したのに対して、1学年において活用の全国との差が-1.3ポイントから+13.2ポイントへと大きく改善された。この違いは1学年の授業の中で難易度の高い課題を取り扱っていたことが背景にあると考えられる。
- 2学年は基礎における全国との差が-10.4ポイントから-2.1ポイントと大きく改善されたのに対して、1学年においては基礎における全国との差は0.1ポイントから0.7ポイントとほとんど変わらなかった。これは2学年がTTによる授業を行っていたため、つまずきのある生徒への支援が有効に働き、授業の中で生徒が諦めずに最後まで取り組んだことが背景にあると考えられる。
- 正答率30%未満の生徒が1学年、2学年ともに6月から12月にかけて増加していることが課題である。学習内容が積み上げ式の数学科において、一度つまずいてしまったところへのケアがされないと、学習意欲の低下を招き、それ以降の学習内容を理解することが難しい。学習が苦手な生徒が増加するのを防ぐためには、つまずいている生徒の実態に気づき、早めに支援を行う必要がある。そのために来年度は次のような取組を行っていきたい。
 - ・ 生徒の見取りについての校内研修
 - ・ 形成的評価としての小テスト・学び直しを組み込んだ単元計画
 - ・ グループ内での良質なコミュニケーションを生むための班編成についての研修
 - ・ 協同学習の意義を教職員・生徒に向けて発信

(2) 【課題2】に対する取組みの成果・課題

- 「授業の分かりやすさ」、「学習への主体性」、「分かった感覚」の3項目において、肯定的な変化はなかった。生徒にとって取り組む値打ちのある学習課題の設定、取り組みたいと思う課題の提示方法、つまずきを解消するための支援などが不十分であったと考えられる。
授業者が提示した課題を生徒がどのように受け止め、どう取り組もうとしているのかを授業中にしっかり見取り、つまずいている生徒の存在に気づき、支援を行っていく必要がある。
 しかし、授業者一人一人が自力でその技術を身につけることは難しい。そのため、来年度は互いの授業を参観し合い、授業における生徒の様子を授業者と参観者で交流する機会を作り出せるようにしたい。

参考文献

- ・ 佐藤暁 (2024)、『対話と協力を生み出す協同学習～一人一人をケアする授業づくり～』、創元社
- ・ 相馬一彦 (2000)、『問題解決の授業を日常化する！中学校数学科の授業改善』、明治図書